

地域研究を基盤とした アフリカ型農村開発に関する総合的研究

掛谷 誠 (京都大学 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)

【概要】

経済変動が環境への負荷を高めている現代アフリカにあって、環境に配慮した農村開発手法の確立は急務である。そのため、多分野の研究者がこれまでの研究を踏まえながら地域社会を総合的に捉え、アフリカの自然環境、とりわけ森林について、その利用と保全の双方の立場から地域の実態に適合した開発計画を立案、実施することには重要な意味がある。本研究の目的は、環境破壊の最前線である乾燥疎開林帯をフィールドとしてきた多分野の研究者が地域研究を深め、地域農村の開発につながる手法を構築することにある。この開発手法は、現場主義を尊重しつつ、地域農村の実態を多角的、学際的なアプローチによって把握することを基本としている。それはまた、住民参加を主軸としながら、地域農村の在来性のポテンシャルを踏まえた地域の発展計画を構想、実践する手法でもある。

日本国政府が主催した東京アフリカ開発会議（TICAD）は、開発におけるアフリカのオーナーシップとそれを支援する国際的なパートナーシップの重要性を主唱し、人材育成や自立的かつ持続可能な開発を重視している。この方針は、持続可能な農村開発をめざす本研究の趣旨と合致している。

【期待される成果】

乾燥疎開林帯とその周辺地域の現状を踏まえ、植生と農耕形態との変遷を関係づけながら、対象地域の特性を農業生態学的に明らかにする。その過程で、タンザニアに重点調査地域を設定し、学際的な調査によって地域の実態を把握するとともに、その地域が抱える問題群を抽出する。調査は、現地研究機関ならびに地方自治体と共同で実施し、セミナー等を通して関係者全員が地域の焦点特性や問題群を共有する。問題解決について住民と協議し、総合的な解決策を立案して、その試行と検証をおこない、有益性が認められた試行は、広域へ普及されることになる。全活動を記録し、その解析をもとに活動を理論化して開発手法を確立する。

【関連の深い論文・著書】

- 1) Kakeya M., Y. Takamura, A. Z. Mattee, *et al.* 1998 Integrated Agro-ecological Research of the Miombo Woodlands in Tanzania: Final Report, JICA, pp.1-413.
- 2) 掛谷 誠 2001 「アフリカ地域研究と国際協力 在来農業と地域発展」、アジア・アフリカ地域研究、No.1、pp.68-80

【研究期間】 平成 16 ~ 19 年度

【研究経費】 73,800 千円

【ホームページ】

なし